

## 翻 訳

## 人間の漂流

J・ロンドン作  
辻井榮滋訳&ノート

われらが前に現われし敬虔博学なる者が、  
怒れる予言者として残した黙示録は、  
ほぼ<sup>ストーリーズ</sup>話にはすぎぬが、それらを  
預言者たちは仲間に語った、  
眠りから覚めて、また眠りにもどった話だと。

(ウマル・ハイヤーム作「ルバイヤート」より)

文明の歴史とは、剣を手に食べ物を追い求めて放浪する歴史である。霧に包まれた原始世界にあっては、見知らぬ人種が蜂起し、殺しあい、食べ物を見つけ、荒けずりな文明を築いては、衰退し、もっと強い手の剣のもとに倒れ、そして滅亡していくのが垣間見える。人間は、他の動物同様、大地をうろつき回ってはむさぼり食えるものを探し求めてきた。<sup>ロマンス</sup>夢や冒険などではなく、飢えの必要からものすごい冒険に駆り立てられてきたのだ。破産した紳士が海を渡ってヴァージニアを植民地化しようとしたのにせよ、やせた<sup>カントン</sup>広東人がハワイの砂糖栽培場であくせくと働く契約をしたのにせよ、紳士であろうが日雇い人夫であろうが、いずれにしても、食べる物を手に入れよう、本国で手に入れられる以上の物を手に入れようとの死にも狂いの試みなのである。

最初の人類以前の類人猿が分水嶺を越えてその先にあるもっとうまい木の実を求めていった時代から、最近のスロヴァキア人が今日のわが国の海岸にたどり着いて、ペンシルヴェイニアの炭鉱で働きに出かけるに至るまで、相も変わらぬ状態なのである。このように人々が移住していく動きは漂流<sup>ドリフト</sup>と呼ばれてきたが、ずばり漂流という語がぴったりである。空腹の痛みに駆り立てられて、無計画に向こう見ずに無意識的に、人間は文字通りこの惑星をあちこちと漂流してきたわけだ。過去には、数えきれなくて忘れられてしまった漂流があつて、はるかに遠い昔のことなので、何の記録も残ってはいないし、あまりにレベルの低い人間ないし人間以前の者たちだったから、石や骨にかき傷も残していなければ、その存在を示す記念物も残してはいない。

われわれが推測したり承知しているこうした初期の漂流は、たしかにあつたに違いない。それはちょうど、最初の直立歩行する獣が「2本の向かいあわせになれる親指から一対の足の親指」を發育させたことによってある種の四手類（手形の足を特徴とする、人類以外の霊長類）の子孫だったことを知っているのと同じだ。恐怖に威圧され、まさにその恐怖が彼らの進化を加速させることによって、われわれのこうした初期の祖先たちは、今日われわれが経験するのとそっくりの空

腹の痛みに苦しみながら、漂流を続け、狩りをし狩り立てられ、食い食われ、鋭く叫び立てる原始時代からの野蛮な状態で千年もの長きにわたって長期の放浪を続け、そうしてようやくその骸骨を氷河の砂利に残す者たちも現われ、穴居人は骨のかき跡をその穴に残すまでになったのである。

漂流は、東から西へ、西から東へ、北から南へ、またその逆と変わり、互いに交差したり、またあらたな方向でぶつかったりはね返ったり突きあたったりしたものであった。中央ヨーロッパからアーリア族がアジアへ漂流してきたかと思うと、中央アジアからウラルアルタイ語族がヨーロッパを越えて漂流してきた。アジアは、ヨーロッパに群がり北欧やイングランドに入りこんだ有史以前の「丸穴族」「広額族」からアッチラ（5世紀の前半に東洋から欧州に侵入したフン族の王）やチムール（アジアの西半を征服し大帝国を建てた）の大群を経て、アメリカを脅かしている今日の中国人や日本人の移民に至るまでの飢えた人間の大波を押し出してきた。フェニキア人とギリシヤ人は、そのあとにどんな漂流があったのかは定かではないが、地中海を植民地化した。ローマは、漂流するアジア人の洪水の前に、北方から漂流してくるゲルマン民族の奔流に呑みこまれた。アングル族（チュートン族の一派で、5世紀以降サクソン族、ジュート族とともに英国に土着した。今の英国人の祖先）、サクソン族（ドイツ北部の古代民族で5、6世紀にアングル族、ジューツ族とともにイングランドを侵略し、融合してアングロサクソン族となった）とジュート族（5、6世紀に前二者とともに英国に侵入したゲルマン族）は、どこから漂流してきたのか誰にもわからないが、ブリテン島に殺到し、イギリス人はこの漂流を世界じゅうに進めていった。腹をすかして貪欲なもっと強い種族に会って退却し、エスキモー人は荒れ果てた極地へ漂流し、ピグミー（中央アフリカの小人の黒人）はアフリカの熱病に朽ち果てたジャングルへと漂流した。そうして今日も、民族の漂流は続いている。それが中国人のフィリピン群島やマレー半島への移住であれ、ヨーロッパ人の合衆国移住であれ、アメリカ人のマントバ州（カナダ中部の州）やカナダ北西部の小麦地帯への移住であるにせよである。

ことによると、えらく驚くべきなのは、南太平洋漂流であろう。他に例のないぐらい先が見えなくて、思いもかけない、危なっかしい漂流ではあったが、にもかかわらず、その果てしのない大洋は人種の漂流を次から次へと受け入れてきた。アジアの本土からアーリア族がどっとやって来て、セイロンやジャワやスマトラに文明を築いた。これらアーリア族の遺跡だけが残っている。南太平洋を越えてはるかイースター島（太平洋南東部の島）までアーリア族漂流の形跡をはっきりと残してからようやく、彼らはすっかり姿を消した。そしてその漂流で彼らの前に漂流を成し遂げていた民族たちとでくわして、今度は彼らアーリア族が、今日われわれがポリネシア人やメラネシア人と呼んでいる他のその後の民族が漂流してくる前に消滅したのである。

人類には、早くから死というものがわかっていた。進化が可能になるとすぐに、牙や爪といった古い持って生まれた才覚よりももっと優れた才覚を作った。火を発見したり自らのために宗教を作る以前に、殺しの仕かけを発明することに余念がなかった。そして今日まで、その最上の創造力と技術力は、より良いさらに良い殺害兵器を作るという例の昔ながらの仕事にもっぱら使われているわけだ。過去からずっと、日々いつだって、殺すことに費やされてきた。そして、ずっと昔の恐怖に打ちひしがれてジャングルに潜む、ほら穴に生息する生き物から、動物界全体をその支配下におさめた。なぜなら、全動物のなかでも最も恐ろしい凶抜けた殺人者へとなっていっ

たからだ。気がつけば窮屈になっていた。場所を作るために殺しをやったが、場所を作るたびに絶えず増加をしていって、また窮屈になり、さらに場所を広げるために殺しを続けた。トウモロコシを植えるために、土地から雑草や森の灌木<sup>かん</sup>を切りはらう移住者のように、人類も自ら物を植えるためにやむなくあらゆる種類の生命を一掃したのだ。そうして手に剣を持って、自分が切望する大地の空間に住むものすごい数の生き物を文字通り切り刻んでいった。そして絶えずその戦いをますます広範囲に進めていって、とうとう今日では、以前にも増してはるかに人や動物を殺す力があるばかりか、微生物の世界の無限の目には見えない多数の驚くべき生物に至るまで、戦いを強行してきているのである。

なるほど、剣でもって立ちあがった者たちは、剣でもって滅んだ。がしかし、すべてが滅んだわけではなく、剣で滅んだ者以上に剣でもって立ちあがった者のほうが多かった。でなければ人類は、今日これほどの大群をなして世界にはびこっていることはないだろう。さらに忘れてはならないのは、剣でもって立ちあがらなかった者たちはまったく立ちあがらなかったということだ。無理だったのだ。このことを考えると、ジョーダン博士（当時のスタンフォード大学の学長で、J・ロンドンの親友でもあった）の戦争理論には間違った点がある。すなわち、最上の者が戦争に送りだされると、次善の者だけがあとに残されて、次善の人種を育てるために生き残り、それでは、人種は戦争のもとに衰えてしまう、とする論だ。もしそうだとしたら、もし育てた最上の者を送りだし、残された者たちが育ちつづけたとすれば、こうしたことをもう1,000万年もやってきて、今日も輝かしい存在であるわけだから、となると、何とも想像を絶するぐらい輝かしく神のような生き物が1,000万年も前のわれわれの祖先ということになるではないか！ 残念ながらジョーダン博士の理論では、そうした古代の先祖はこのすばらしい評価に応えることができない。先祖は過去の状態で測るのであって、どんな巡回動物園の猿の檻<sup>おり</sup>の前にあっても、われわれの祖先のずっと大昔の真の姿を幣見するなりヒントや類似点なりに気づく程度なのである。殺すこと、絶え間なく殺すことによって、この惑星を修羅場にすることによって、そうした猿のような生き物がわれわれのようなものにまでなってきたのだ。ヘンリー（ウィリアム・アーネスト・ヘンリー。1849-1903、英国の詩人・批評家・編集者）が「剣の歌」で述べている通りだ。

「剣は歌う——

あたかも朝の  
横断幕や若枝のごとくに  
暗闇を追いやり、  
金属から鉞<sup>こうがい</sup>津へ、  
適者や強者から  
不用者や弱者へと、  
全人類を篩<sup>ふるい</sup>にかけ、  
獣性や底なしの多産  
と相戦い、  
影<sup>おびただ</sup>しき数のしくじりや、

内なる世界の  
 手さぐり模様の  
 半ば盲目的乱行や、  
 えらくあくせくと働きすぎるのを  
 阻みおり。

時が経ち人間が増えるにつれ、空いた場所を求めてさらに遠く離れて漂流した。人間の他の漂流とぶつかり、人間を殺すことはけたはずれになった。弱者や衰微な者は、剣のもとに倒れた。たじろいだ民族、肥沃な谷や肥えた河口の三角洲で次第に豊かになった民族も、砂漠や山での苦難に育まれたもっと強い者たちの漂流によって一掃された。知られざる無数の何十億もの者たちが、有史以前の時代にそんなふうには減ぼされた。ドレイパー（不詳）曰く、20年に及ぶ野蛮な戦争で、イタリアは1,500万人の人口を失い、また、ユスチニアス一世（483-565、東ローマ帝国の皇帝）の代の戦争、飢饉、ペストによって減った人類は、1億という信じがたい数に上る。ドイツは、三十年戦争（1618-48、主にドイツ国内で行なわれた宗教戦争）で、600万人の住民を失った。わがアメリカの南北戦争（1861-65）の記録など、ほとんど思い起こす必要もない。

それから人間は、剣以外の方法でも減ぼされてきた。食糧、飢饉、ペスト、殺人などは、人口を減らす——場所を空ける——有力な要因である。チャールズ・ウッドラフ氏（1846-1916、アメリカ・ペンシルヴェイニア州出身の社会・経済学者）は、その「民族の膨張」の中で以下のように例証している。1886年に黄河の堤防が決壊したとき、700万人が溺死した。1848年のアイルランドの不作によって、101万の死者が出た。1896-97年と1899-1900年のインドの飢饉では、2,100万の人口減少が生じた。台北の暴動と回教徒の反乱では、1877-78年の飢饉と合わせると、2,000万の中国人が殺された。ヨーロッパでは、大ペストの嵐がくり返し吹き荒れた。インドでは、1903年から1907年のあいだに、ペストの死者の数は平均すると1年に100万—200万に及んだ。ウッドラフ氏の言う、現在合衆国に住んでいる1,000万の人が結核で亡くなる運命にあるという主張は信頼できる。そしてこの同じ合衆国において、1年に1万の人が即死させられている。中国では、毎年300万から600万の幼児の命が奪われており、これが全世界の幼児殺しの総計となると、すさまじいものがある。アフリカでは現在、人間が眠り病（アフリカの伝染病）で数百万亡くなっている。

戦争以上に人命を奪うものは、産業である。どこの文明国にあってもひじょうに多くの人々がスラム街や労働者街に押しこまれ、そこでは病気が濃みただれ、非行が蝕み、飢饉が慢性的であり、近代的な戦争で死ぬ兵士以上にたちまちのうちに数のうえでもっと多く亡くなってしまふ。ロンドンのイースト・エンド（英国ロンドン東部にある下層民が住む地区）のスラム地区の幼児死亡率の場合など、ウェスト・エンド（英国ロンドンの西部にある地区で、高級住宅街がある）地区の中流階級のその3倍である。合衆国においては、過去14年間で、国の常備軍全体の数よりも多くの炭鉱夫が死傷している。合衆国労働局によれば、1908年1年間の、労働者の事故死が3万—3万5,000人で、負傷者は21万人以上という。ありていに言って、労働者にとって最も安全な所は軍隊なのである。だからその軍隊が最前線にあつて、キューバや南アフリカで戦っているとしても、兵卒のほうが本国の労働者よりも生きる公算が大きいわけである。

それなのに、こうした恐ろしい戦死者名簿、過去の途方もない殺害、現在の途方もない殺害にもかかわらず、今日もこの惑星には10億と3/4の人類が生存しているのである。即座に結論を下せるのは、人間というのはきわめて多産ですこぶる不屈だということだ。かつて世界にこれほど多くの人々がいたためしがない。過去何世紀にもわたって、世界の人口はもっと少なかったし、これから先何世紀もさらに増えていくに決まっている。となると、あれほど一笑に付され、なおおもその気味の悪い頭をもたげ続けるあの例の恐ろしいもの——すなわち、マルサス（トーマス・マルサス。1766-1834、イギリスの経済学者）の学説——が思い起こされる。未開の大陸全体の植民地化と結びついて、人間が食糧生産の効率を高めていくとなると、「人口の法則」についてのマルサスの数学的所説を明らかに嘘だと言って何世代にもわたって非難してきたわけだが、彼の学説の本質的な意義に異議を申し立てることなどできはしない。人の数というのは、たしかに生計に圧力をかけるものだ。なのに、いかに速く生計の度合いが増しても、人口は必ずそれに追いついてくるものなのである。

人間が狩猟の進化段階にあったときには、わずかな人口を維持するのに広い地域が必要だった。羊飼いの段階になるとともに、生計手段が増していったので、同じ領地でさらに多い人口が養われた。農耕の段階になると、さらに多くの人口をあと押しした。そして、今日では、機械文明の食糧を得る能力が増したことで、さらに多くの人口が可能になっている。このことは、空論でもない。人口は、男女子供たち合わせて17億5,000万に達しており、この多大なる人口は飛躍的に増加しているのである。

新世界への大量のヨーロッパ人の漂流は続いてきたし、今も続いている。なのに、ヨーロッパの人口は1世紀前に1億7,000万であったのが、今日では5億になっている。この増え方でいくと、生計が立たなくなってしまうのでなければ、今から1世紀もしないうちに、合衆国の人口は5億になるだろう。

人間は、腹をすかした生き物であり、殺し屋であり、絶えず空き場所がないために苦しんできた。世界は、慢性的に人口過密の状態できた。1平方マイルに572人のベルギーは、旧石器時代人を500人しか養えなかったデンマークと同様に、人口過密状態になっている。ウッドラフ氏によれば、耕作地なら猟場の1,600倍の食糧が生産できるという。ノルマン人の英国征服（1066年）の時代から、何世紀にもわたって、ヨーロッパは1平方マイルに25人しか養えなかった。今日ヨーロッパは、1平方マイルに81人を養っている。こういうことを説明するのは、ノルマン人の英国征服後数世紀にわたって、その人口が飽和状態だったということだ。それから、貿易と資本主義、新しい土地の探検と開拓や、労力が省ける機械類の発明と科学的な原理の発見と応用などとともに、ヨーロッパの食糧を獲得する能率の激増がもたらされた。すると、たちまちその人口が急増したというわけである。

アイルランドの1659年の人口調査によれば、かの国には50万の人口があった。それが150年後には、800万になっていた。何世紀にもわたって、日本の人口には増減がなかった。食糧を獲得する能率を増やす術すべがなかったようだ。ところが、60年前に、ペリー提督が日本の門戸を打ち倒して、西洋世界の優れた食糧を獲得する能率の知識や機械類を導入した。この生活レベルの向上とともに直ちに人口の増加が始まった。しかも日本は、人口がまたもや暮らしを圧迫しているのを知るや、剣を手にしてさらなる空き場所を求めて西方への漂流に乗りだした。そして、剣を手

に殺したり殺されたりしながら、独力で台湾と朝鮮を勝ちとり、漂流の先鋒をはるか満州の肥沃な奥地にまで駆り立てたのだった。

すこぶる長期にわたって、中国の人口は4億——飽和点——でとどまっていた。黄河が周期的に何百万という中国人を溺死させる唯一の理由は、そうした何百万もの人々が耕作をする土地がほかにはないということだ。そして、そうした大災害が起こるたびに、人間の波が巻きあがり、今や何百万もの人々がその不安定な領地にどっと入ってくる。そこへと追い立てられるのは、情け容赦もなく生計を立てないわけにはいかないからだ。避けられないのは、中国が遅かれ早かれ日本のように、われわれの食糧を獲得する効率を学んで応用するだろうということだ。そしてその時がきたら、同様に避けられないのは、中国の人口が見当もつかないくらい何百万と増えて、やがてまた飽和点に達するだろうということだ。そうすると、西洋の考えを吹きこまれて、日本のように手に剣を取って、さらなる空き場所を求めて中国独自の漂流を突拍子もなくやりださないだろうか？ これこそ、またあらたな世に言う困りもの——黄禍——である。とはいっても中国の人たちは、他の人種と同様もっぱら男であり、歴史全体を通じて、男は皆この惑星上のあちら、こちら、いたる所へと腹をすかして漂流し、食べる物を探し求めてきたわけだ。だったら、ほかの者がやることを中国人がしないはずがあらうか？

だが、人間の営みに一つの変化が生じてきて久しい。いっそう強い民族の近來の漂流といえば、弱小の種族を介してさらなる陸地空間へと進路を開拓し、平和へ、さらに広範な、さらに長続きする平和へと導いていった。弱小の種族は、殺されるという報いを負うて、武器を捨てて内輪同士で殺しあうのをやめざるを得なかった。頭皮を剥ぐインディアンや首狩りをやるメラネシア人は、滅ぼされてしまうか、民事訴訟や刑事訴追の優れた威力を信じこむように改心させられるかした。この惑星は、征服されつつあるのだ。野蛮なものや有害なものは、馴らされるか排除されるかなのだ。猛獣や共食い人間から死とかかわる微生物に至るまで、容赦なく攻撃される。そして日ごとに、アフリカの敵対する砂漠族であろうとパナマのような疫病を生ずる熱病の穴であろうと、敵意ある領地のさらにさらに広い領域が、人類にとって平和で住むに適したものとなってゆく。大多数の在宅の人々はといえば、合衆国なり英国なりドイツの現世代の何パーセントが戦争を目にしたか、あるいは直接に戦争のことを知っているのだろうか？ 今日ほど世界にこれほどの平和があったためしがない。

かの赤い（過激な）反逆人であった戦争自体が、今や終わりつつある。労働者よりも兵士であるほうが安全である。生きる見込みは、工場や鉱山よりも活発な軍事行動のほうが大きい。殺すという点では、戦争は無力になりつつあり、このことは戦争の仕組みが過去においてこれほど高価でこれほど恐ろしいものでもあったことは決してないという事実にもかかわらずである。今日平和時の軍備は、昔の戦時よりも高つく。常備軍の維持費のほうが、かつて帝国を征服するのにかけた以上に高い。かつて殺しをやるのにかけたよりも、今のほうが殺す準備をするほうが高つく。ドレッドノート型軍艦（20世紀初期の最大最強の軍艦）の1隻の価格で、殺戮兵器を備えたクセルクセル（バルシャ王）の全軍に必要なものを装備できるだろう。そして、その堂々たる軍備にもかかわらず、戦争はもはや、その方法がもっと単純だった頃のような殺し方をしない。近代的な艦隊による砲撃1発で、結果として驟馬1頭を殺してしまうぐらいのものだ。世界の二強国間での20世紀の戦争の死傷者数は、製鉄所の労働者をひどくねたんで顔を青くさせるほ

どのものである。戦争は冗談<sup>ジョーク</sup>になってしまった。人間は、戦いで立ち向かえない戦の怪物を自分で作ったのだ。近頃では生計は豊かであり、生活も安っぽいものではなく、生きた人間の性質として今日の機械類によって可能になった大虐殺をほしいままに行なうなどということはできない。このことは、理論に基づいたものではない。それは、一方で南アフリカ戦争 (1899, ブール戦争, ボーア戦争とも呼ばれる) と米西戦争 (1898, アメリカとスペインの戦争), 他方南北戦争 (1861-65) とナポレオン戦争 (1795-1815, ナポレオンが欧州征服を企てた戦争の総称) における複雑な戦闘と人間の死の比較によって示されるだろう。

戦争というのはそれ自体の展開によって無益なものとなるばかりか、人間自身も、知恵が増し道義も高まって、戦争に反対する。大いに学んだというわけだ。戦争は、人間の常識とは両立しない。戦争は、良くないもの、馬鹿げたもの、そしてひじょうに高くつくものだと考えるのである。生じた損害や成された結果の割には、それだけの価値がない。個人間のけんかの場合においては流血の不和の代わりに民事裁判所の仲裁のほうがもっと実際的なのとちょうど同じように、国家間の紛争においても仲裁のほうがより実際的である、と人間は判断する。

戦争は消滅しつつあり、病気も征服されつつあり、人間が食糧を獲得する効率も上がってきている。こうした要因があってこそ、今日10億あるいは10億の3/4ではなく、10億と3/4の人々が生きているのである。それにこうした要因があってこそ、世界の人口はきわめて近いうちに20億となり30億に向かって急速に上昇していくだろう。世代の寿命は、着実に伸びている。人の命は、この頃では以前よりも長い。生存は、それほど不安定なものではない。新生児は、過去のいかなる時よりも生き残る機会が大きい。手術や衛生設備のおかげで、生命の不幸や病気の惨害に伴う死者の数を減らしている。男女ともに、過去なら急な絶滅をもたらしたであろうさまざまな欠陥や弱点があっただろうが、今日では生き、父母として多数の子孫を残している。そして食糧を獲得する効率が高まるにつれ、人口もそれに従って急増するのは当然である。生命の「底知れぬ多産」は変わらない。食べ物を与えられると、生命は増えるのだ。今日生きている10億と3/4のうちのわずかなパーセントは、生命の叫び声が生まれるのを抑えるかも知れないが、それもわずかなパーセントにすぎない。この点において、人間動物における生命というのは、他の動物における生命ときわめてよく似ているわけだ。

それからさらに別の変化が、人間の営みに現われてくる。政治家連は歯ざしり<sup>のろ</sup>をして呪いの叫びを発し、人間はその浅薄な机上の学問が具体化された偏見によって損なわれ、文明はめっちゃくちゃになるとわれわれに請けあうのだけれど、今日、社会の趨勢<sup>すうまい</sup>は世界全体が社会主義のほうに向かっている。古い個人主義は、消滅しつつある。国家は、従来なら厳粛に個人に属するものと考えられていたことにもますます干渉してきている。だから社会主義は、結論的なことを言えば、もっと多くの人々が食べる物を手に入れられるまったく新しい経済的・政治的制度なのである。要するに、社会主義とは改善された食糧獲得機能なのである。

しかも、社会主義は今までよりも容易にもっと大量に食糧を獲得するばかりか、そうした食糧をもっと平等に分配できるだろう。社会主義が当分約束するのは、すべての男・女・子供たちに食べたい物をすべて与え、時も量も望むだけ食べられることである。生計は、一時的には、きわめて大きく押しもどされるだろう。結果として、みなぎる生気が高波のように増してくるだろう。結婚が増え、さらに子供が生まれてくるだろう。今日何百万と認められる強制不妊も、もはや認

められなくなるだろう。貧民窟や労働者スラム街の何百万という多産の人たちも、今日では慢性の栄養失調のためにあらゆる病気で死に、多産の大部分が達成不能のままに死んでしまうが、社会主義の食糧獲得効率が高まれば、食べたいものがすべて食べられるようになる将来には、亡くなることもないだろう。

人口が今後けたはずれに増えていくことは、否定できないだろう——ちょうどそれが、食糧獲得効率の増大に続く過去数世紀のあいだにけたはずれに増えたように。そうした将来の人口の規模の大きさは、ほとんど想像もできない。だが、地球の表面には限られた陸と水しかない。人間には、その驚くべき功績にもかかわらず、この惑星の直径を増やすことは無理だろう。まだ誰も足を踏み入れたことのない大陸など、昔日のこととなって存在しなくなるだろう。この住むに適した惑星には、万年氷から万年氷に至るまで、人が居住するだろう。そして食糧獲得に関しては、他のすべての場合と同様、人間は有限にすぎない。食糧獲得の思いも寄らない効率が達成されるかも知れないが、遅かれ早かれ、人間は気がつけばマルサスの深刻な法則に直面しているだろう。人口が生存に追いつくことになるばかりか、押し寄せていって、その重圧は冷酷且つ残忍なものとなるだろう。将来のどこかで、人間が皆食べる物が十分でないという事実<sup>か</sup>に自覚をして直面する時が来るだろう。

その日が来たら、それからどうなる？ 古い時代遅れの戦争が再発するのだろうか？ 人口が飽和状態になれば、生活はつねに安かろう悪かろうになる。ちょうど今日の中国やインドがそうであるように。あらたな人間の漂流が起こって、空き場所を求め、窮屈な生活から抜けだして土地空間を切り開いていくだろう。もう一度「剣の歌」から。

「従え、さあ、従うのだ、  
英雄たち、わが収穫者たちよ！  
背高く穀物が実った所に  
汝らの鎌を突き刺すのだ！  
穀物は、大鎌で刈りとり、  
王国の豊作の束を縛って、  
刈り株畑の帝国で  
外皮を剥がされ、からからに乾かされる。」

たとえ万一、それまで通り、人間が腹をすかして、手に剣を持って、殺し殺されながらさまようとしても、救済など一時的なものにすぎないだろう。たとえもし一民族だけが残る民族のすべての最後の生き残りまで切り倒すようなことがあっても、その民族は世界じゅうを漂流して、この惑星をその生き物でいっぱいにし、再び生存最低生活に押しかけるだろう。そうなると、死亡率と出生率はバランスをとらねばならないだろう。人々は、死ぬか、それとも出生を妨げられねばならないだろう。明らかに、より高い資質を持った生命力のほうが広まり、多産は徐々に減ってゆくだろう。だがこの減少は、きわめてゆっくりとしたものなので、生存への重圧は存続するだろう。子孫を制限<sup>コントロール</sup>することが、人間の最も重要な問題の一つとなり、国家の最も重要な務めの一つとなるだろう。人々は、生まれることをとうてい許されやしないだろう。

病気が、時々、そうした重圧を和らげるだろう。病気は寄生虫であり、忘れられてはならないのは、ちょうど人間の世界に漂流があるように、微生物の世界にも漂流——食べ物の探求——があるということだ。微生物の世界についてはほとんど知られていないが、そのほとんど知られていないということが恐ろしいのだ。微生物の数の調査など行なわれることなどないだろう。誠文字通りの「底知れぬ多産」があるからだ。人間の数が多数だとは言っても、個人の総計など、微生物の想像を絶したおびただしい数と比べれば、物の数ではない。皆さんの、あるいは私の体の中には、今現在、今日の世界の人間の数より多い個々に実在する物が群がり蠢<sup>うごめ</sup>いているのである。それは、われわれには見えない世界である。ただ最も近い境界線を推測するだけだ。強力な顕微鏡や超顕微鏡を使って、2万倍に拡大しても、微小の生き物のあの深みを垣間見ることすらかなわない。

そうした世界のことについては、おおよそにしかほとんどわからない。わかっているのは、そんな世界から病気が生じてきて、人間を苦しめ殺すということだ。われわれにわからないのは、これらの病気が、すでに存在している顕微鏡クラスの品種が単にあらたな方向に漂流していくものなのか、それとも、新しい、まったく新しいもので、ただ自然発生的につくりだされたものなのかということである。後者の仮説は筋が通っている。というのは、もし自然発生的な世代が依然として地球上で生ずるとすれば、複雑な品種よりも単純な品種の形をとって生ずるほうがはるかに可能性が高いと立論する。

また別のこともわれわれは知っている。それは、あらたな病気が現われるのは、人口が過密な状態にある場合だということだ。過去にはそうであった。今日でもそうだ。そして、医師や細菌学者たちがどんなに賢明であろうと、彼らがこうした侵略者とどんなにうまく立ち向かおうとも、あらたな侵略者が現われつづける——腹をすかした生き物のあらたな漂流がわれわれをむさぼり食おうとしているのだ。だから、生きていくための重圧に窒息してしまいそうな将来の人口が飽和状態にあって、あらたな、つねにあらたな多数の破壊的微生物が生じて、地球に群がる人間に場所をよこせと身を投げかけつづけるだろう。人間の知恵をもってしても打ち勝てないうちに、広範囲の人口を減らしてしまうような前例のない<sup>どうも</sup>猛猛な疫病さえ現われるかも知れない。それに、こんなこともわかっている。こうした目に見えない多くの微生物が、人間が残酷で恐ろしい淘汰を切りぬけて微生物に対して免疫性ができることで、どんなにしばしば征服されようとも、人間の登場以前や消滅以後も存在するであろうこれらの微生物のあらたな大群がつねに現われるであろう、ということも。

消滅後も？ 人間はそれからいつかなくなって、この惑星は人間のことをもう知らなくなるのだろうか？ 全体的に人間の漂流が向かっているのは、そっちの方向なのだろうか？ この点では神自身は物言わない。とはいっても、彼の予言者たちのなかには、地球が無に帰してしまう最後の日について真に迫った説明をしているのではあるが。科学にしても、ラジウムの思索や物質の究極の特質についての分析案にもかかわらず、人間が死に絶えてしまうこと以上の言質<sup>げんち</sup>を与えてはいない。人間の知識の及ぶかぎりでは、法則というのは普遍的なものだ。自然力は、ある不変の条件のもとに反応する。これらの諸条件の一つが気温である。実験室の試験管の中であれ、自然の工房であれ、すべての化学反応は限られた範囲の温度内でのみ起こる。最新の<sup>かげろう</sup>蜉蝣である人間は、哀れにも気温の生き物であり、温度計によってその短命の日をもったいぶって歩いてい

るのである。その背後には、人間には暑くて存在できない過去があり、その先には、寒すぎて存在できなくなるような未来がある。人間にはそうした未来に順応できないが、それは、普遍的な法則に変更を加えられないからであり、自らを構成している構造も分子も変更できないからである。

以下の、おそらくは科学的な知性がこれまで成し遂げた最も無謀な想像力を具体的に表現しているハーバート・スペンサー（1820-1903、英国の哲学者）の件<sup>くだり</sup>を熟考してみるのがいいだろう。

「物質と同様に運動も、量が決まっているので、運動がもたらす物質の配分の変化は、どの方向に向かおうと、不滅の運動はそこで直ちに逆の配分を必要とするだろう。明らかに、引力と反発作用という普遍的に共存する力は、すでに見たように、宇宙のいたる所のどんな微細な変化においても周期的変動を必要とし、また、その変化の全体においても周期的変化を必要とし——引きつける力が優勢となって、絶対的な集中を引き起こすかと思えば、反発力が優勢となって、絶対的な拡散を引き起こす——進化と死滅の時期が交互に生じるのである。“かようにして、今進んでいるものと類似した連続する進化があった過去の想像図が思い起こされる。また将来には、連続する他の進化が続くかも知れない——原理的にはずっと同じでも、具体的な結果としては決して同じではないものが”」

そうなのだ——われわれが最もよく知っていること——進化と死滅の時期が交互にやってくるということ。過去にはわれわれが今生きているものと同様の進化がほかにもあったし、将来にも同様の進化がほかにもあるかも知れない——それだけのことだ。あらゆるこうした進化の原則は変わることがないが、具体的な結果は決して二度と同じものではない。人間だってそうではなかったし、そうだったし、二度と同じものとはならないだろう。われわれの理解を超えた長いながい時間に、われわれが「地球」と呼ぶあの太陽の衛星の特別な進化にかかった時間は、ほんのごくわずかにすぎない。しかも、そのわずかな時間のうち、人間が費やしているのは、ほんの短い一部だ。最初の猿人から最新の有名な科学者に至るあらゆる人間の漂流全体ですら、星の降る夜の無限の全体を横切る幻影、閃光、瞬く間の動きにすぎないのである。

温度計が下がれば、人間はおしまいだ——その欲望や格闘や実績にもかかわらず。その民族の冒険や民族の悲劇にもかかわらず。何十億にさらに何十億も掛けたほどの、血に染まった殺害にもかかわらず。科学がいつか発見し口にする何かさらに進んだ見当もつかない言葉が出てくるのでなければ、これが科学の最後の言葉である。それまでは、星降る宇宙空間以上に遠くは見えない。そこでは、「つかの間の仕組み<sup>システム</sup>は、泡のごとく消滅する」からである。星々がロウソクのごとくなくなり、大きな太陽が際限のない長い時間のうちのカチッという時の刻みのあいだ赤々と輝いては消えてしまう広漠たる広がりの中で、人間というちっぽけな生き物って、どんな値打ちがあるのだろうか？

それから生きているわれわれにとって、忘れられた文明の荒廃した諸都市に今日認められる大昔の漂流に起こった以上に悪いことなど起こり得ない——荒廃した諸都市は、発掘されると、さらに昔の都市、市の上に市が、14もの都市が廃墟の上にあるのが発見される。さらに昔のものになると、放浪する牧夫が家畜の群れを追い立て、さらにそれらに先行するものとなると、穴居人や未開の地の人間が野獣の趾骨を砕き地上から消滅していった、そんな地層にまで行きあたるの

である。そのことについては何ら恐ろしいことはない。リチャード・ハヴィ (1864-1900, アメリカ・イリノイ州生まれの詩人) が死に直面したとき、「見よ！ 私は生きてきた！」と言ったのではないか。そして他のもっと偉大な者とともに、われわれは本気でわが身をなげうつことができるのだ。ほんの一滴の生存, ほんのひと味の存在もいいではないか。そして事によると, われらの最大の偉業は, 不滅を夢見たということだろう——たとえそれを実現できなかったとしても。

### 「人間の漂流」記者ノート

相当な多作家であるジャック・ロンドン (1876-1916) という作家にこれまで長年月かけて, 研究と翻訳の二足のわらじをはいて取り組んできた。系統的研究に着手したのが1972年初めで, 初の論文 (「ジャック・ロンドン: その習作期に於ける作品についての一考察」(『現代英語文学研究』第3号, pp.42-55) が1975年10月だから, もう40数年になる。ちなみに, 初の訳書 (短編集) 『ジャック・ロンドン大予言』(晶文社) の出版は, 1983年1月のことである。以来, 30本を越す論文, 30冊の著・訳・編書, その他数えきれない雑誌連載・講演・講義を重ねてきた。日本でよく知られてきた『野性の呼び声』や『白牙』といった単なる動物小説作家どころではなかった。……

死後出版を含め優に50冊を超える著作を残したロンドンの作品すべてに目を通すことなど難しいが, 最近縁あってこのエッセイを読む機会に恵まれた。一読して, 驚愕した。その博識ぶり・ユニークな視点・気が遠くなるような過去への遡及の仕方および未来への遠大な見通し等にてである。無論, 翻訳しておくことの意義も感じた。

新しいところでは, 『ジャック・ロンドン名論卓説集』(明文書房, 2014年5月) というノンフィクションを共訳で出しているし, フィクションや自伝的作品の翻訳は相等数世に問うてきた。たしかにそれらは, いずれもユニークな, しかもロンドンを知るうえで必須のものばかりである。

それでもなお, 「人間の漂流」(“The Human Drift”) という一篇は大きな存在である。たしかに, 100年前に考え書かれたエッセイではあり, 今日現在を生きるわれわれ現代人には少々のはずれとも思える箇所がいくつもあるかも知れない。大事なのは, そのタイム・スパンの圧倒的長さからあらゆる可能性を包含・想定している点である。その長い線上のほんの一点にすぎない今日現在にいわせて, 何が起るかまるで予測のつかない時を生きるわれわれ。ただただ目先のことに右往左往するばかりの現代文明人。「僕が目撃したサンフランシスコ大震災」を翻訳した際の記者ノート (『立命館経済学』第62巻第1号, 2013年5月) にも縷々記したが, 事は大地震に限らない。最新のものでは, インドで熱波が発生し, 気温が摂氏47度にまで上昇した (2015年5月末)。アメリカ・イリノイ州では大竜巻が発生。わが国の各地で起こる地震, 火山の噴火, 5月あたりからたび重なる時節はずれの台風, ……数えあげると, もう切りがない。6月1日には, 中国・湖北省の長江 (揚子江) で456人乗りの客船 (2,200トン) が竜巻の発生に伴い転覆して, 死者400名超を出す悲惨な事故も起きている。……

「人間の漂流」は, 1911年1月に『フォーラム』(Forum) に掲載された。ロンドン35歳の時である。その後, 他の7篇とともに彼の死 (1916年11月22日) 後に出版された書籍としては最初のものとなった。(The Human Drift: The Macmillan Co., February, 1917.)